

歩いてきた道に残る もう一人分の「足跡」

温室の一角を事務所を兼ねた応接室としている丸山さんは、房ごと色づいたバナナのあるその事務所で異業種交流サークルのピヤパーティーを開いたりもする



丸山芳弘さん (55歳)
岐阜県中津川市阿木5791

岐阜県の山間の村でシクラメンの種苗と花、洋ラン、草花・ハーブなどを生産する(株)中津川種苗を経営。美智子夫人に加え今年7月より長男の恭一さん(26歳)が経営に参加した。1500坪のガラス温室。丸山さんのテーマは「ナンバーワンを目指すよりオンリーワンを目指すこと」。

岐阜県中津川市阿木。中央本線で名古屋から一時間の恵那駅から車で30分。文字通りの七曲がり坂を登り詰めた山間の集落到丸山芳弘さんの温室はあった。

農業関係者たちの「流行り言葉」でいえばいわゆる「中山間地」である。

丸山芳弘さんは、全国で10人くらいという事業的規模でのシクラメン種苗生産者の一人。3ヶ所に建てた1500坪の温室でシクラメンの種苗と花、洋ラン、草花類やハーブ等を約30種の生産と育種をする農業経営者である。丸山さんと奥さんの美智子さん夫婦に加え今年の7月からは長男の恭一さん(26歳)が経営に参加した。恭一さんは、東京農大を卒業後1年間ハワイのアンセリウム生産農場で研修を積み、さらに、かつて丸山さんが花作りを実践的に学んだ種苗会社・第一園芸で2年間研修してきた。その他に労働力として2人の研修生とパートを6人雇っている。平成3年に株式会社化に改組している。

家を離れて自分探しの東京体験

丸山さんの花作りとの出会いは、高校生時代の昭和34年だった。当時、80aの水田と養蚕、そして山仕事が主体の丸山家で父上の博文さん(81歳)がフレーム温室でのシクラメン種苗生産を始めたことが最初だった。子供時代からカタログを見て種を買い、草花を育てることが好きだったという丸山さんは、その当時から将来は花栽培をしようと考えていた。日本も豊かさを感じ始めてきた時代、これからは必ず花の販売が伸びると確信し

近隣地域から贈答用の注文も多い。育種から販売まで中津川種苗の仕事の範囲は広く、恭一さんの経営参加は頼もしい



ていたからだ。それ以上に、丸山さんは牛の糞を担いで泥の中に這いつくばってする水田の仕事が嫌だった。同時に、村の精神風土を含めた当時の農家の暮らし方、生き方そのものに違和感の様なものを感じていたようだ。

高校を卒業するとすぐ、現在の第一園芸の前身である農場に研修生として入った。丸山さんにとって、それは花栽培の研修であると同時に、村に育った自分をもっと広い世界の中で見つめ直し確認する過程でもあった。父・丸山博文の長男である前に、岐阜の山村に育った青年で

ある前に、丸山芳弘個人であることを確認する自分探しの研修時代であったのではない。

東京から戻ってすぐ、30坪の小さいけど本格的なガラス温室を建てた。さらに23歳で父の博文さんから経営を任せられた。それから、ほぼ3年おきぐらいにハウスの増設や設備の更新を進めてきた。予想通り花の需要は伸びていき、売上げもそれに伴った。

最初は700坪を一つの目標にしたが、世の中の発展や暮らし方に合わせて、ハウスの規模は1000坪、1500坪と大きくなっていった。種苗生産だけでなく、花のシクラメンを出荷するようにもなった。それはより優れた選抜育種をして種苗需要者にたいする評価を高めるためにも有効だった。さらに洋ランの栽培や育種、さまざまな草花類についても育種や生産をするようになった。

「生き方」を追う自分へ

丸山さんの経営も決して一本調子に発展してきたわけではなかった。

丸山さん自身の花作りへの興味が動機であった花種の多角化だったため、それは売上げを伸ばししたが、仕事がそれ以上に増えて複雑になっていった。

若く、才気も観察力もある先進の経営者だった丸山さんには、きっとこれからの市場動向も見えたとし、それを作りだす能力もあったのだろう。しかし、いくら闇雲に働いても、それを保証する労働力ではなかった。

今から15年前、丸山さんは体を壊して

入院してしまった。それからの数年間、祖父父母が亡くなり、奥さんの入院等と事故が重なった。ただ闇雲に夢を追って体を酷使してきた結果であった。自分だけでなく家族の体も。

「今のようない市場動向なら潰れても不思議ではない。需要の伸びに助けられたんです、お客さんや家族に助けられたんです。表向きは回っていても、経営として考えればガタガタだった」と丸山さんは当時を振り返る。

道は経営を削ることしかなかった。思いを込めて育種から始め、すでに顧客も増えていたポリアン種の採種、苗作りの仕事も、後輩に顧客ごと技術やノウハウを譲った。ハウスのローテーションを減らすこともやむを得なかった。

その当時の反省を丸山さんはこう述懐する。

「フルスロットルでエンジンを回したらいつかガタがくる。八分で回る経営を目標にすることにした。そして、やみくもに自分の『夢』を追うのではなく、自分の『生き方』を追いかけてよと思った。健康に感謝して、体を含めた自分自身がつと本質的にこうありたいという人生を生きてみようと思いついたわけです」

ナンバーワンよりオンリーワン

実は、そんな経営というより生き方の方向転換は、経営としても別の可能性を生みだしていった。

丸山さんは、奥さんと一緒にパラプレインで空を飛ぶという趣味がある。その他にも、さまざまなボランティア活動、

海外の若人をホームステイさせる受け皿となったり、夫婦や家族で他人や社会にかかわっていくさまざまな人生の楽しみ方をしている。また、丸山さんは、何の利害もなくただ自らを磨きたいという思いで集まる異業種交流の「21世紀クラブ」というサークルに入っている。そこに営業のチャンスを探めたりはしない。だからこそさまざまな発見や気付きもある。直接の仕事から離れてこそ何かが見えてくるのだ。異質な経験や人生の面白がり方、責任を持った人々との会話の中に、何か自分の心の内側と「呼び合う」ような共感を感じる。

丸山さんはやがて、仕事においても人生においても「ナンバーワンではなくオンリーワンの自分」になることをテーマと考えるようになった。

チャンスは目の前にある

いつの間にか、シクラメンの季節になるとマスコミが取材にきて、それを見た人々が丸山さんを訪ねてくるのが恒例になっていった。そんな人々たちをハウスに呼入れて自分で花を選ばせて買ってもらう。ついでに別の花を一輪あげたりもする。手間が取られるだけで、それで売上が伸びたりするわけでない。

「どんな山の中にもいても、チャンスは手を差し伸べて自分の前を走っている。どこに居ようとも、目の前にいっぱい開けた社会があるのに、なぜ井の中のカワズでいようとするのだ」と、丸山さんはいう。

異質な相手の価値を理解でき、誰とで

も語りあえる共通の言葉を持つこと、いつも外に向かって発信する意志があれば、チャンスも情報も向こうから寄って来るというのだ。そして、

「これが、もし東京だとしたら、よっぽどのことをしていても誰も注目してはくれない。こんな山奥だからこそ小さな話題でもマスコミが取り上げ、それを見てまた別のTVが、雑誌が寄ってくる。

でも、それでいくら儲かったなんて目先のことはかり考えるからチャンスは自分の前を通り過ぎてしまうのです」

親しいからこそわきまえる

かつては、それこそ疾走するように夢を追いつけた丸山さんである。美智子夫人の存在は大きかったはずだ。金勘定だけでなく。また「僕は田舎

の三面記事的な話しが嫌い」という丸山さんには、奥さんの村付き合いがフォローする部分も必要だったろう。

丸山さんと僕の話の横で聞いていた奥さんは、何度も「また、お父さんあんなこと言うって」という笑みを

浮かべた。

20歳で結婚して29年。お転婆娘だったという美智子夫人は娘時代に兼業農家に御嫁にいくのだけは嫌だったという。

「だって、夫はサラリーマンしていて、よそで綺麗にしている女の人を見ているのに自分は1日野良仕事で真っ黒け。そんなの嫌だ。結婚するなら二人で一緒に仕事をする人だと思ってた。でも、結婚したら夫は突っ走るばかり、その後始末しながらついていくというのも、結構大変でしたよ。判るでしょ」と笑う。でも、それが嫌だったという顔ではなかった。「仕事も一緒に、遊びも一緒に、家事だって一緒にするよ」という丸山さんは、「妻がいなかったら、これほど自由には動けなかったらと思う。彼女は僕の顔を立ててくれているわけだけど。夫婦や

家族というのは、とくに農家の場合、生活も仕事も一緒。そんな一番親しい仲だからこそ遠慮がなくつちや駄目なんだと思う。礼を失うというのは、相手のことを全部判っていると思って遠慮がなくなること。全部ぶちまけたらよいというものではない。むしろ夫婦だからこそ言いたい言葉というものがあるんじゃないだろうか。親しいからこそ気に触ることだってあるんだ。それがお互いに認め合うとか守り合うということなんだと思う」

夫婦は、むしろ性格や能力の出し所が違う方がうまくいく。さらに、これは理想かもしれないが、出会うべき人に出会い共通の価値観を共有できていれば、どちらも権利など主張しなくてもすむ関係というものができるのかもしれない。

「権利」なんかいらない、「義務」だけでよい。むしろ共有できる人生の「義務」を果たすことの喜びがあるとしたら、それは「権利」で与えられるものよりはるかに豊かなものではないか。

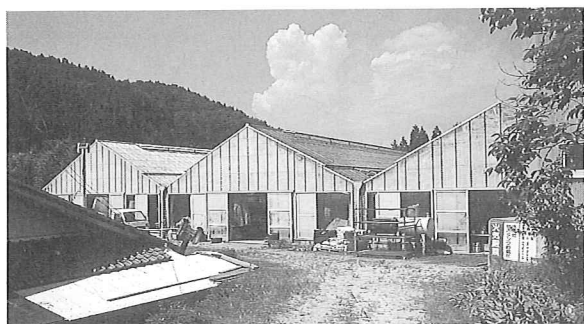
美智子夫人がそう考えているかどうかは確認しなかったが、僕には丸山さんご夫婦がそんな風に見えた。また御二人の話を伺って、社長であり夫の芳弘さんの歩いてきた道には、もう一つ美智子さんの足跡が鮮やかに残されていると思った。(昆 吉則)



美智子夫人は、「請求書を書くのも面倒臭い」という丸山さんに変わって影の経営者としての役割を果たしている



恭一さんが帰って来た日、父である丸山さんは「うちの仕事に慣れる前に、俺の仕事の良い点、悪い点を全部メモしろ。そして俺とは別者のお前になれ」と言い渡した



丸山さんの住む阿木集落は、文字通り山間の村だ